



山崎正和著作集



戯曲(2)

中央公論社

山崎正和著作集 2

定価四二〇〇円

昭和五十七年八月十日印刷
昭和五十七年八月二十日発行

著者 山崎正和

発行者 高梨 茂

印刷者 青木 勇

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七

振替東京二一三四

©一九八二 検印廃止

山崎正和著作集 2 目次

野望と夏草 三幕六場とエピソード

舟は帆船よ 三幕とエピソード

おう エロイーズ！ 一幕

實朝出帆 二幕とエピソード

木像磔刑^{もくぞうはりつけ} 三幕

地底の鳥 二幕十二場

書誌 530

3

97

195

251

345

435

山崎正和著作集
2
戲曲(2)

野望と夏草

三幕六場とエピソード

人物

後白河帝。天皇、のちに上皇、法皇。

徳大寺。後白河の側近。

九郎。今様藝人。

いち。今様藝人。

平清盛。

平時子。清盛の妻。

平徳子（建礼門院）。清盛の娘。

藤原信西。

阿波内侍。信西の娘。

源義朝。

源為義。義朝の父。

平忠正。清盛の叔父。

崇徳上皇。後白河の兄。

二条天皇。後白河の子。

堅田三郎。衛兵の長。

侍 1、2、3、4、5、6。

踊る女 1、2、3、4、5。

僧 1、2。

第一幕 第一場

保元元年（一一五六）夏。いはゆる「保元の乱」の鎮まった直後。

場所は、後白河天皇の御所、高松殿の庭。

夜。

月の光か篝の火か、暗黒の舞台に二条の強い光が射して、そのなかにひとりづつ、血と汗に汚れた敗軍の将が太い杭に縛られてゐる。源為義、平忠正、それぞれ疲れた遅しい顔を仰向けて眼を閉ぢてゐる。若い衛兵の長堅田三郎がひとり傍に佇む。

暫時の沈黙ののちに……

平忠正 （かっと眼を開く） 殺されるか。

源為義 （静かに眼を開く） わからぬ。

平忠正 血で血を洗ふ合戦の果てだ。首を打たれてもふしぎはない。

源為義 だが、戦場の外で捕虜の首を打つのは死罪といふもの。死罪は、この国では二百年のあひだ行な

はれてをらぬ。

平忠正 いや、このたびの戦さはちと違ふぞ。今上の帝が血を分けた兄の上皇と戦ふ。摂政関白の藤原家が朝敵となった。世の中の背骨が真ふたつに折れたのだ。なにが起るか誰が知らう。

源為義 世の中はともかく、侍の情に交りはあるまい。天皇方の大将、清盛殿はそなたの甥、同じく義朝は私の息子。源平それぞれが、肉親あひわかれての戦ひなのだ。義理はあっても、おのが同じ血を流す憎しみがあらうか。

平忠正 この扱ひを見るがいい。敗れたとはいへ、一軍の將たるものを夜露にさらす。今上の帝はわからぬお人柄だ。加へて、お傍につかへるあの信西といふ坊主の心根が知れぬ。いつも何やら恨みがましう、世間を盗み見るやうな眼つきをしてゐる。ああいふ男は、えてして勝つと残忍なものだ。

源為義 藤原信西か。偉い学者ださうだがどことやらもの欲しげだ。藤原の一族とはいへ、末流の生まれとはあつたものか。

平忠正 先年、藤原頼長殿の邸を訪ねて、あの男は涙を流して訴へたといふぞ。同じ学問がありながら頼長殿は左大臣、信西はただの少納言、家柄の違いが恨めしいとな。その涙のかけで、さだめし今日の復讐のたくらみを暖めてゐたにちがひない。

源為義 さういへば、頼長殿はどうなされたことであらう。深傷を負はれたといふが、無事に都を落ちのびられたか。

平忠正 たとへ落ちのびられても、長い御運ではあるまい。かんじんの上皇様さへ捕はれたと聞くぞ。

源為義 上皇様もはかないお身の上だ。御先代の蔭にかくれて、帝であるうちも影の薄いお立場であった。やと御自身が上皇になられると、今度は御当代の帝に叛かれる。やむを得ず立った戦さに敗れて、心中、御無念のほどはいかばかりであらうな。

平忠正 世の中の底が抜けたのだ。なにかも狂うてしまった。天皇と上皇と藤原の一族、三つが巴になつて誰が政事を行なふかを争つてゐる。やれ院政だ天皇御親政だと、親子兄弟がそのためにせめぎあふ。おかけでわれわれ侍どもは、そのあひだを右往左往。(低く笑ふ)

源為義 この源為義は、上皇のお召しがあったからお味方をしたばかり。院政がよいか天皇御親政がよいか、そんな理屈は侍にはわからぬ。だが、それが血をわけた親と子を闘はせるとは、いかにもあさましい末法の世だ。

堅田三郎が近づく。

堅田三郎 声が高い。勝手なお喋りは禁じられてゐますぞ。

平忠正 ほう。その方は清盛の手の者だな。顔に見覚えがある。行って清盛に伝へろ、こんな侮りは許しがたいとな。

堅田三郎 お黙りなさい。清盛殿は官軍の大將。朝敵の身で狎れ狎れしいお言葉は憚りがありませうぞ。平忠正 清盛が官軍でこの忠正が朝敵か。なるほど戦さには負けたくないものだ。

堅田三郎 勝ち負けにかかはりはない。われわれは義を以て朝廷のお味方をしたのだ。

源為義 たはけたことを。その方たちはただ運がよかっただけだ。よしんば天皇方が正しいとしても、私には上皇のお召しがあり、清盛殿にはどういふわけか天皇方のお召しがあった。弓矢取る身に、それ以上の才覚があるわけではない。

堅田三郎 御老体にながわかる。かねてより、天皇御親政は清盛殿の理想なのだ。

源為義 理想。理想だと。

堅田三郎 さう。ひとは獣ではない。おのが理想によって行なひを決するものです。

源為義 つまり、舌先三寸の言葉のことだな。をかしたものが若者を動かすやうになつて、おかげでひとが獣に劣る行なひをするやうになつた。いいか。もののふの行なひを決するに言葉は要らぬ。まっすぐな心と、人柄を見わける澄んだ眼があればそれでよいのだ。

堅田三郎（笑ふ）時代は変わった。説いて聞かしてもおわかりにはなるまい。

源為義 わかりたうもない。乱れた世には、わからぬ言葉ばかり流行るものだ。

平忠正 さうして、順送りだ。（堅田三郎に）今にその方たちも、自分にわからぬ別の言葉を聞くやうになる。

堅田三郎 およしなさい。（掴みかかる）清盛殿に無礼は許さぬ。

平忠正 待て、あれを聞け。

遠く、さんざめく宴の音が聞える。九郎といちの斉唱で、ひときは高く今様の節が流れて来る。

「楠葉の御牧の土器造り、土器は造れど、娘の貌ぞよき、あな美しやな、あれを三車の、四車の愛行輦に、打ち載せて、受領の北の方と、言はせばや。」

平忠正 近ごろ流行る今様の節だ。あれは、帝の祝賀の宴だな。

堅田三郎 さう。歌ってゐるのは、九郎といち。信西殿が帝に奨められた、当世第一の今様の名手だ。

平忠正 ふん。うっとり聞き惚れてゐるな。その方もやはり、今様が好きか。

堅田三郎 嫌ひであらうわけがない。新しい御世の新しい歌だ。

平忠正 なるほど、その方どもの理想と同様にな。歌も理想も、いつとき流行ってすぐにすたる。いや、怒るな怒るな。そなたたち、若い者の今様狂ひは悪いとはいはぬ。しかし、どうだ。万乗の天子のお好みとしては、今様はいささか品がないとは思はぬかな。

源為義 まったく、今上の帝は奇妙なお人柄だ。なんの間違ひか、兄の上皇やあの白河上皇とは似ても似つかぬ。政治も武術もそっちのけで、日がな遊藝の道に明け暮れてをられる。このたびの合戦の最中

にさへ、帝だけはよそごとのやうに藝人どもの相手をしてをられたと聞くぞ。

平忠正（三郎に）天皇御親政とその方どもは夢中だが、かんじんの帝御自身は御迷惑ではないのかな。同じ流行りなら、帝には理想よりも歌の方がお気に召してゐるのかもしれない。

堅田三郎 帝御自身のお気持ちなどだれが知らう。われわれはただ、みづからの理想にしたがってお味方を申しあげるまでだ。

平忠正（低く笑ふ）それはまた迷惑な味方だな。天皇御親政の理想とは皇室への忠義、つまり大御心おほみこころにそひたてまつるといふことではなかったのか。それが今上のお気持ちも知らぬとすれば、そなたらの理想もちと筋の通らぬ理屈だな。

堅田三郎 政事は皇室のつとめ、帝はそのために生まれて来られるのだ。

平忠正 だが、その帝がいやだと仰せられたら？ 日がな今様に興じて、これが政事だと仰せられたら？

堅田三郎 そのやうな帝に、帝の資格はない。

平忠正 なるほど。そこで今上には御退位を願ひ、皇太子を立ててみづから政治を行なふのだな。だがまさにそれこそ、その方たちの憎む摂関政治といふものではなかったのか。

堅田三郎 名ばかりの帝を立てて、政事を私するのが摂関政治のやり方、われわれは、自分で世をみそなはず力のある君を帝と申しあげる。

平忠正（哄笑する）語るに落ちた逆賊の言葉だ。その理屈で行くと、今に平清盛が自分で帝にならぬともかぎらぬ。

堅田三郎（叫ぶ）黙れ。言葉をもてあそんで人心をまどはすつもりか。

平忠正 ここにはその方ひとりしかをらぬ。まどはされてゐるなら、その方自身だ。理想とは、ひとに説いて聞かせる筋道のことではなかったのか。これしきの言葉のやりとりで、逆上する若僧がなんの理

想だ。

堅田三郎（激しく忠正を打つ）新しい理想が古い性根にどうしてわかる。理屈より先に、新しい御世の新しい性根をたたきこんでやる。

三郎、弓の折れで忠正を左右から打ち据ゑる。炬火たいまつを手にした平清盛、源義朝が登場。

平清盛 待て。ひとの性根を変へるのに弓の折れでは役に立たぬ。（進み出て）叔父上も叔父上だ。お元氣なのはなによりだが、さう棄てばちになられるものではない。罪状詮議ざんぎについては明日の評定ひょうじやうまで持ち越されましたからな。せっかくひと晩、手足をのばして休める機会をふいにされては、この清盛の骨折りが無駄になる。

平忠正 なるほど。今宵ひと晩、じっくりと生殺しを楽しむつもりだな。

源為義 そこにゐるのは義朝ではないのか。義朝。すぐに殺さぬつもりなら、この繩目を解け。これ以上の辱しめは死罪よりもむごいぞ。

源義朝（悲痛に）父上。（清盛にむかって）清盛殿、もうこのうへは……

清盛、冷く見返して肯く。三郎が忠正の繩を解き、義朝は為義の膝下にすがる。

源義朝 父上。殺させないでいたしません。どうして死罪にないでいたさせませう。この私の戦功に代へても、必ず父上のお命は乞ひ受けてごらんにいれます。（繩を解く）それにしても父上、なぜ私のいさめをお容れくださいませでした。天皇御親政の大義にめざめて、なにゆゑ帝の軍勢に馳せ参じてくださいませんでした。

源為義 なんども聞かせたはずだ。そなたが使ひに来たとき、すでに源の家には上皇方のお召しが参って

ゐたのだ。侍にとってお召しのありなしは時の運といふものだ。

源義朝 板ばさみのお立場はせつないほどわかってをりました。だがそれなればこそ、なにゆゑ義によって立つ道を選んでくださったさいませんでした。延喜・天曆の御世を今に返す大事業に、義朝はぜひ父上をお迎へしたうございました。

源為義 わからん。私にはわからんのだ。(清盛をにらむ) なぜ源の本家には帝からのお召しが遅れ、長男たるそなたひとりに勅がくだったのか。

源義朝 父上。お召しの早い遅いが問題ではございません。源の家は藤原一族の私兵ではなかったはず。帝おひとりにお仕へすることこそ、武人一統の誉れではございませんか。

源為義 なるほどわが上皇方には、左大臣、藤原頼長殿が加はってをられた。だがこの為義は頼長殿ではなく、上皇おんみづからのお言葉によってお味方をした。崇徳上皇といへば先の帝、今上にとってもお兄上にあたられるお方だ。

源義朝 (首を振って) 天にふたつの日輪はなく、国にふたりの帝があつてはなりません。たとひ先帝といへども、今上の詔には従はれるのが天下の道でございます。

堅田三郎 (清盛に囁く) くだらぬお喋りです。やめさせませうか。

平清盛 やらせておけ。義朝は一所懸命、ああして自分自身にいひ聞かせてゐるのだ。

源為義 (義朝に) そなたもまさか忘れてはゐまい。院政といふものはあの白河上皇がお始めになった。

そして白河様こそ藤原家をおさへ、天下の実権を朝廷にとり戻された英傑だ。その天皇御親政の御一人者が、なにゆゑみづから院政をお始めになったか。今上のお若いうちは先帝が後楯となつて、おふたりで世を統べられるのが朝廷のためによしと考へられたのだ。

源義朝 お言葉ながら、義朝には承服いたしかねます。天皇は律令の掟に従はれますが、上皇には従はれ

るべき法律がない。その御自由な御身分が、院政といふものをどれほど腐敗させたか。不平不満の野心家が院の御所に集まり、天下を私する風潮があったのは父上もよくごぞんじのはずです。

源為義（鋭く）義朝。そなたの説く忠義とはさういふことか。小賢しい見で帝や上皇の御治世を天秤（てんびん）にかけ、おのれの才覚で誰に仕へるかを決めるのがその方の忠義か。

源義朝 父上、義朝はただ……

源為義 いふな。私はそなたが考へるほど愚かではない。天下の治め方については、それなりに夢もあれば考へもある。だが弓矢とる身はそれを深く胸にをさめ、黙ってお召しを待つのが本当の忠義だと信じてゐる。

源義朝（泣く）父上。ああ、それでこそ父上です。お考へはあまりにも一徹だが、義朝はいつもさういふ父上をこそお慕ひ申しあげてをりました。

堅田三郎（清盛に）これはどうやら、逆に義朝殿の方がいひ伏せられましたな。

平清盛 わかつてをる。どうせ義朝はあれだけの男だ。

源義朝 御安心ください。その忠義なお心はきつと帝のお耳に入れ、父上の御赦免を乞ひ受けて参りませう。

源為義 ただひとつ、どうしても解せぬことがある。いったい誰が、わが源の家を帝から遠ざけようとはかったのか。

堅田三郎（清盛に）あの疑ひは危険です。義朝殿にあれを聞かせぬ方がよい。

平清盛 うむ。よし、やめさせろ。

三郎、義朝と為義のあひだを分ける。突然、忠正が清盛に声をかける。